

小学生を対象としたダンス・ワークショップに関する一考察

- 進行者に着目して -

河合史菜

(平成26年10月31日受理)

A study of dance workshop for elementary school students

- Focusing on facilitator in dance workshops -

Fumina KAWAI

(Received October 31, 2014)

はじめに

ワークショップとは「参加体験型グループ学習」と言われるように、「ワークショップ・リーダーから参加者への一方的な働きかけの学習でなく、参加者が主体的、積極的に参加し、体と心をもって体験する中で、相互に学びあうグループによる学習であり、創造活動である」(中野, 2001, p.11)とされている。このようなワークショップの活動は、心理学、環境教育など、様々な分野において取り入れられ、ダンスにおいても例外ではない。ダンス・ワークショップ(以下DWS)は、増山(2003)がコミュニティにおける実践事例からその効用を考察するなど、近年学校・福祉・地域のコミュニティなど様々な場所で展開され、人々がダンスに触れる新しい形態として注目を集めている。白井(2012)は、大学生を対象としたコミュニティ・DWSの効果に関する研究を行い、参加体験により心理状態がポジティブ傾向へ変化する可能性が大きいこと、主体的に取り組むことにより心身の変化や感情により良い刺激を与えることを明らかにしている。原田(2012)は、DWSにおける学びについてグループの創作に着目して考察し、参加者の自他についての本質的な気づきや学びを確認した。このようにDWSは、近年少しずつ効果や意義が明らかにされ、主体性や相互の学び合いを特徴として対象者も幅広く、年齢や経験の有無を越えて活動が行われることも珍しくない。

学校教育においても、「芸術家と子どもたち」による取り組み^{注1)}をはじめとして、学校へアーティストが訪れ、DWSが実施される機会が増加している。高橋(2010)は、教員と芸術家が協同で創るワークショップ型の授業を小学校表現運動として実施し、成果を報告している。また2013年に開催された第65回舞踊学会大会では「体育の授業に生かすダンス・ワークショップ」と題して、アーティストが中学生と共に行う公開型のDWSが取り上げられ、2014年には、これまで数多くのDWSを実践してきたアーティストと芸術支援団体が共同開発した、ダンス授業の教材が登場する^{注2)}など、学校教育におけるDWSの可能性は広がりつつあると考えられる。これらの活動は、DWSを通して、学校教育が

らダンスの可能性を見つめ、また学校教育におけるダンス授業について新たな視点を見出すきっかけとなるのではないだろうか。アーティストと学習者で共に創り出す DWS は、「探求型学習」「ゴールフリーな学習」(文部科学省, 2013)といわれる今日の学校教育におけるダンス授業に対しても示唆に富むものであると考える。

そこで本研究では、DWSの進行者に着目し、熟練の進行者による小学生を対象とした事例を取り上げ、参与観察及びインタビュー調査を通して、DWSの詳細を報告し、特徴を明らかにする。

ダンス・ワークショップとは

現在、ワークショップという言葉はかなり広い意味で使われている(中野, 2001)。ここでは、ワークショップ及びダンス・ワークショップの定義や特性について、先行研究及び文献から整理する。

1. ワークショップ

ワークショップの語源をたどると16世紀までさかのぼる。茂木ほか(2010)によると、原義は英語の「Workshop」の手仕事のための仕事場・作業場・工房で、共同で何かを作る場所を意味していた。それが、現代演劇やアート、都市計画や人間関係トレーニングなどの世界で、多様な展開をしながら発展してきた(中野, 2003)。日本においても多様な分野で行われており、中野(2001)が住民参加のまちづくり系、演劇やダンスなどアート系、環境教育や自然体験活動、開発教育や人権教育、心と体、自己成長や癒し、社会教育や学校教育、人関係や心理学、企業研修やビジネスといった7つの分野に分類している。以上のようにワークショップは多様な領域で発展し、それぞれの世界で歴史や定義があるため、多義的であるが、これらには共通して「参加」「体験」「相互作用」の3つの特徴があるとされている(中野, 2003)。それらの参加体験型グループ学習であるワークショップは「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験し、グループの相互作用の中で何かを学び合ったり創り出したりする、双方向な学びと創造のスタイル」(中野, 2003, p.40)とされている。

ワークショップの進行者はファシリテーターと呼ばれ、中野(2003)が「参加者主体の学びを促進し、容易にさせる存在」「一人一人を引き出す存在」(中野, 2001, pp.146-147)であることなどを述べており、DWSの実現においても、進行する立場にあるファシリテーターは場を生み出していく重要な役割を担っている。ファシリテーションとはもともと「促進する」「助長する」「(事を)容易にする」「楽にする」という意味の英語「ファシリテート(facilitate)」の名詞形である。したがってファシリテーターとはその機能を担う人、「進行促進役」「そそのかし役」というような意味がある(中野, 2003)。一方、今日の日本のDWSにおけるファシリテーターは、山内ほか(2013)がワークショップにおけるダンス・身体表現の領域を「舞踊家による表現活動を中心としたワークショップ」と述べているように、多くをダンサーや振付家が担っており、進行だけに留まらず企画から関わりDWSを実践しているケースが多い。本研究では、「ワークショップにおける進行者」という狭義の意味を念頭に置いて、進行者という名称を使用し論を進めていくこととする。

2. ダンス・ワークショップ

ワークショップと同様、DWSという言葉もかなり広い意味で使われている。増山（2003）が「その実態は様々であり、ワークショップという名称を使っても、本質から外れているようなものもある」と指摘するように、事実 DWS は明確な定義や方法はなく内容は多岐にわたっている。

ワークショップは中野（2001）によって前述した7つに分類され、「アート系」と呼ばれるカテゴリーの中に演劇、ダンス、美術、音楽、工芸、博物館、自己表現といった項目が含まれ、ダンスもこれに分類されている。特にアート系では、昔からあるお稽古場のような「教室」ではなく、「ワークショップ」と題しているものは、通常の「創る人と観る人」の位相を超えた問い直しを迫るものが多いとされている（中野，2001）。そして、内的な学びのプロセスを重視したり、真の創造性に挑戦したり、自らの身体や声による切実な表現こそが、社会や世界の変革につながるという大きな視野を持つものなど、その幅は大きいと述べている（中野，2001）。

白井（2013）が、近年日本では、コミュニティを対象としたダンスのワークショップやダンス公演が、コミュニティダンスとして行われていること、それらの目的は、生涯学習や、健康・福祉、地域活性化、文化振興等であり、各地域の公共的事業の一部としてコミュニティダンスが実施されているものが多いことを述べている。日本でコミュニティダンスを実施している団体である NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークでは、コミュニティダンスを「ダンス経験の有無、年齢、性別・障がいに関わらず誰もがダンスをつくり、踊ることができるという考えのもと、アーティストが関わり“ダンスの持っている力”を地域の中で生かしていく活動」（佐藤，2010）と述べている。その言葉通り、コミュニティダンスにおける DWS は、多様な対象者へ向けて活動が行われており、ダンスの本質的な力を生かした、誰もがダンスに関わることができる活動であるといえる。

増山（2003）は、コミュニティダンスの独自性と生涯学習における意義として、つながりを生み出す 多様な要素を取り込める 自己表現と自己肯定 心と体の調和 芸術の享受の5つをあげており、自立した一人のひとりの新たな学習の出発点となることを示唆している。

原田（2012）は、多くの DWS では、ファシリテーターが自身のダンステクニックや指導法を参加者に伝授することや身体の動かし方などを体験させるというものであることを指摘し、DWS の特徴を中野（2003）の「参加」「体験」「グループ（相互作用）」という観点から整理している。まず「参加」とは、単なる動き（テクニック）練習や一方的に指示されて動くだけではなく、参加者が自ら動きを探求するあるいは動きを創り出すという活動が必要であるとしている。次に「体験」とは、進行者から与えられた動きの体験だけではなく、試行錯誤しながら動きを生み出し新しい動きと出会う、あるいは動きの探求を通して新しい自分と出会う体験であることを述べている。最後に「グループ（相互作用）」とは、参加者同士が自らのモチベーションによって積極的にかかわり互いに学び合う、身体を通してのコミュニケーションや創造活動であると述べている。

DWS は近年、少しずつ上記のような効果や意義が認識されつつあるが、現状では、DWS 自体や進行者についての研究は多いとはいえず、その定義や手法は個人にゆだねら

れている。

方 法

1. 調査対象

1) 対象とする DWS の選定と進行者の概要

調査対象は、先行研究を踏まえ、これまで様々な参加者に対し活動を行ってきた熟練の進行者が行う DWS を選定した。本事例の進行者の概要について以下に示す。

ダンサー・振付家・地域の公立ホールと連携し、子ども、市民、高齢者、障がい者など多様な対象に向けたワークショップを多数行い、成果発表するなど、日本におけるコミュニティ・ダンスの草分け的存在として活動。保育園、小中学校や福祉施設での出張授業やジャズ、クラシック、神楽など多種多様なコラボレーションも多数行っている。子供から大人まで、一般の人から専門家まで、国や地域、ジャンル、世代を超えて多くの人々から注目を集めている。

2) DWS の概要

本研究で対象とした DWS は、文化芸術に触れる機会の少ない中山間地域等において、アーティストが滞在し、地域住民との積極的な交流と創造発信を行うアーティスト・イン・レジデンス事業の一環として行われた。芸術家と地域住民が相互に刺激を受け、文化芸術面から地域活性化へとつなげる事業の取り組みである。「ダンス体験授業」と題され、音楽家と進行者のコラボレーションで行われた。小学校に進行者が訪れ、学校に通う小学生 3～6 年生の各 35 名・36 名を対象に実施された。対象事例の概要について表 1 に示す。

表 1 対象事例の概要

ワークショップ名	観察期間	参加者	参加人数	備考
ダンス体験授業	2013/6/6 10:45～12:25	小学生3～4年生	35名	小学校に進行者が訪れ、単発のワークショップを行う
ダンス体験授業	2013/6/6 14:00～15:30	小学生5～6年生	36名	小学校に進行者が訪れ、単発のワークショップを行う

2. DWS 参与観察

参与観察及びビデオカメラ 2 台を用いて VTR 撮影を行った。1 台は全体の様子を、1 台は進行者を追跡して撮影した。また IC レコーダーにて進行者の声を収集した。そこから、時間・プログラム内容・活動形態・進行者の行動・言葉がけを中心に観察記録を作成し、プログラム内容、進行者の提示方法、進行者の関わり方を抽出・分類した。プログラム内容は内容のまとまりごとに 1 つの活動として区切り、先行研究(村田, 2005)(森島, 2006)を基にカテゴリー化した。プログラム展開の詳細は末尾に示す。尚、本文中におけるプログラム内容名は『』で明記している。進行者の行動は先行研究(高橋ら, 1991)を基に、進行者が「参加者に対し何をしているか・どのような関係にあるか」を観点として参加者への関わり方に限定し、新たに「リード」「示範」を加えたカテゴリーに区分した。「示範」は模範を示すこと、「リード」は、進行者自身も動きながら、動きを提示する関わりを指す。提示方法は「動きの提示・言葉での提示・動きと言葉以外の提示」の観点から分析した。また、内容と関連させた進行者へのインタビュー回答も参考に分析を行った。

3. 進行者へのインタビュー

インタビューの質問は、プログラム内容の背景・参加者への関わり方の背景・進行者の捉え方の3つの観点から設定し、脱線を許すかたちで半構造的に行われた。ICレコーダーに録音し詳細に文字化、インタビューデータを基に活動の意図、進行者のダンス観やDWSに対する背景を整理し、プログラム内容と進行者の関係について考察した。また観察記録分析の妥当性が高まることを期待し、それに反映させた。尚、本文中の進行者の発言は斜線で表記し、インタビュー時は(A)、活動時は(B)と語尾に表記した。

結果と考察

1. プログラム内容

プログラム内容を分析した結果、A)「ストレッチ・準備運動」B)「動きや感覚を意識する内容」C)「他者との関わりを意識する内容」D)「リズムによって動く内容」E)「即興表現」F)「その他」の6つに分類された。

各プログラム内容の内容別実施時間の割合を図1示す。

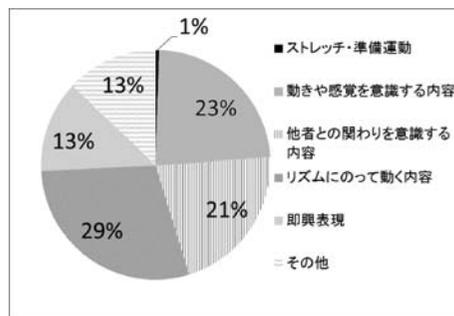


図1 内容別実施時間 (%)

「リズムによって動く内容」が29%と最も多く挙げられた。次いで、「動きや感覚を意識する内容 (23%)」「他者との関わりを意識する内容 (21%)」「即興表現 (13%)」「その他 (13%)」「ストレッチ・準備運動 (1%)」であった。ここから本事例では、ストレッチや準備運動が少なく、リズムによって動くこと、動きや感覚を意識すること、他者の存在や他者との関わりを意識する活動がおおよそ均等に行われていることが分かる。他者と関わることについて進行者は、「もっとダンスの中で、手をつないだり、そこ(人と組む中)で自分以外の身体の存在を通して自分が見えてくる、みたいな。人と踊るとそういう体験が発見できる(A)」と述べている。以下、各内容の特徴について述べる。

A)「ストレッチ・準備運動」

本事例では、ワークショップの始めに必ずストレッチまたは準備運動が行われた。ここでは、短い時間で全身を使い伸び・縮みを中心に準備運動を行う様子が見られた。これは「小学生とかは、もうストレッチとかよりも、とにかく早く動いたり日常じゃない時間を過ごした方がいいと思うから、あんまりストレッチとかやらない(A)」というインタビュー回答からも、対象を踏まえた内容が行われたことがうかがえた。

B) 「動きや感覚を意識する内容」

『だるまさんが転んだ』『誰かと関わって色々な動きをする』等があげられた。特に本事例では、『誰かと関わって色々な動きをする』に見られる様な、進行者のリードで次々と多様な動きや感覚を体験する活動が顕著に見られた。この活動は2つのDWSで共通して見られた活動である。「ひたすら真似をすることで踊りのエッセンスを入れていく(A)」と述べられているように、参加者は、進行者と一緒に動きながら様々な動きを体験する中で、新しい身体の使い方や感覚に自然と触れている。その他、目を閉じた活動も、多く見られた。目を閉じることで視覚情報が閉ざされ、身体へ集中することで、身体感覚がより一層研ぎ澄まされると考えられる。その他『体でパーグーチョコキの形をつくる』では、進行者が声の強弱や質感を意図的に変化させ、声に反応して動く参加者の動きに、質感を持たせていた。

C) 「他者との関わりを意識する内容」

ここでは、『繋がったポーズ』の活動にみられるように、他者との関わることそのものが内容になっている活動と、『鏡の動き』『誰かと関わって色々な動きをする』に見られる様に、2人組や4人組など活動形態として他者を意識する内容があげられた。これは進行者の「何事も関係性(A)」という考えが背景にあると考えられる。進行者は自身のDWSを、進行者から参加者への直接的で一方的な投げかけではなく、参加者の同士の関係性の中で、互いにその場の空気や雰囲気共有することにより、徐々に広まりながら進行されていると述べ、「空気感染システム(A)」と例えている。また、「とにかく構えないで、リラックスしてワークショップにまず参加してもらいたい(A)」という考えから、「真似をしていって簡単な動きでみんなでシェアしたり、誰かと手を繋いだり、タッチしたりってのを導入で入れてる(A)」と述べている。それは「参加者同士をタッチするだけで、本当に一気にみんな緊張が緩んで、お互い緊張してるよねってことが分かったり、急に気持ち近くなるんですよ(A)」と述べているように、他者と関わることにより、参加者同士の心身のほぐしを意図していることが考えられた。また、他者との関わりを取り入れることに関して「単純なルールでみんなが動けるとするのが1番の理由(A)」と述べ、「ただ繋がるってだけだったら、みんな誰だってできるでしょ。赤ちゃんだって抱っこしてればいいし、歩くのがやっとなおばあちゃんも、目の見えない人だってできるので、参加できない人がいない(A)」と述べている。つまり、他者との関わることで、老若男女を問わず様々な参加者の動き出しが容易になるような工夫をとっていることが考えられた。

以上の様に、本事例では他者との関わりを意識させる内容を多く取り上げることで、心身をほぐし、様々な参加者の動きだしを容易する工夫をとっていることが考えられた。また他者との関わることにより、進行者からの直接的な投げかけではなく、参加者同士の関係性の中で全体が進行されるように意図していることが分かった。「空気感染システム(A)」と例えられているように、進行者は、自然と生まれてきた雰囲気や参加者同士の関係を大切にしながらDWSを進行していることが考えられた。

D) 「リズムによって動く内容」

『音楽によって踊る』『楽器に合わせて自由に弾んで踊る』等があげられた。これは本

事例が、音楽家とのコラボレーションで行われた為であると考えられる。ここでは、進行者のリードで参加者が自由に弾む段階と、リズムの感じを捉えて意図的に動きを生み出す段階が見られた。更に進行者は活動の中で、リズムと身体の関係性について参加者に説明する時間を設け、質問や感想を求めながら参加者の理解を深めている。インタビューでも「まずは身体を使うことから入って、そこから音楽性っていうことを考えていくっていう。まあ音楽とダンスっていうことと。せっかく音楽家がいるので。でもいつもあたしがやるのととても近くて・・・それがたまたま、生(演奏)だったってだけ(A)」と述べている。このことから、進行者は音楽と身体の関係性について日頃から高い関心を持ち、内容として取り入れていることが考えられた。

E)「即興表現」

ここでは、参加者が自ら即興的に動きを生み出す内容があげられた。本事例では『「花」に合わせて自由に動く』の様に、イメージを捉えて表現するパターンと、『目を閉じて自由に動く』の様に他者やリズムを通して即興的に動くパターンが見られた。前者では、「花」という歌のもつイメージや質感をしっかりと話し合い理解を行った上で、参加者が各々の解釈で動きを生み出している。後者は、他者とのやりとりや律動をきっかけとして参加者が即座に動き出す状態が見られた。進行者はどちらのパターンでも「自由に動いてみましょう(B)」「動きを創ってみましょう(B)」と言葉がけを行っている。即興表現について進行者は「即興というか、自由に動くっていうことが普通はない。・<中略>・でも、型を通してみんな自由に踊りたいって思うでしょうきっと(A)」「型で嫌になっちゃう人もいるので、まずはフィーリングから入っているのが理想形。自由に踊るところから入って。(A)」と述べ、自由に動くことを促していると考えられた。しかし同時に「一番難しいというか、即興で踊るなんてとても難しいことなんだけど、まずはそこから入っていく(A)」「でもそこから、できないよねって。じゃあ何が必要なんだろう。っていう風に発展できる(A)」と参加者が自由に動くことの難しさも指摘している。ここから進行者は、即興的に自由に動くことの楽しさと難しさを受け入れつつ、それを生かして次の展開に進む手掛かりとしていることがうかがえた。また「やっぱりバリエーションで、即興が楽しめずに振り付けが楽しめる人もいる(A)」と述べており、型のある動きと自由な動き双方の面白さを理解しつつ、様々な対象者に合わせて臨機応変に対応していることが考えられた。イメージを捉えた即興表現を取り入れた意図については、「ただノリのいい打楽器とかリズムカルな曲だとエキサイティングしてそれで終わりってなっちゃう。ただノリだけではなくて、言葉にならない気持ちのようなものとか、形のようなものをできるツールとして身体があるんだってことを体験した方がいいと思って(A)」と述べている。ここから、即興表現では、他者やリズム、イメージといったものから「フィーリングを受ける(A)」つまり参加者の感じ取りを重視し自由に動くことを意図していると考えられた。更に、「ただノリだけ(A)」で即興的に動くのみにとどまらず、イメージや感情を表す、表現媒体としての身体の体験を意図していることが示唆された。一方で、一般の参加者が自由に動きを生み出すことの難しさや、自由と型とのそれぞれの面白さを理解し多様な参加者に合わせてバリエーションが必要であることも認められた。

F)「その他」

『音楽と身体』『歌の説明』『楽器で遊ぶ』など、動きを伴わない内容があげられた。『楽器で遊ぶ』は音楽家と参加者が楽器で演奏する内容である。『音楽と身体』『歌の説明』は、進行者が参加者に音楽と身体の関係性について説明を行うことや、歌の由来や歌詞について説明を行うことや、感想を求める内容である。感想の時間を設けることについて「シェアすることってすごく面白いんですね。フィーリングをシェアすることで(参加者が)安心したりする(A)」と述べており、ここでも参加者同士の共有を重視する進行者の考えがうかがえた。また「学校の場合は教育現場なので、学校の先生は無視できない。先生はこの授業は何のためにやったんだろうって、このアイデアを持ち帰りたいと思ってた時に、シェアの時間は、先生がこの授業がなんだったかを考えるきっかけになる(A)」と述べ、長期的な視野でDWSを捉える進行者の考えが読み取れた。

2. 提示方法と進行者の関わり方

1) 提示方法

参加者に提示された動き別にその実施時間の割合について図2に示す。

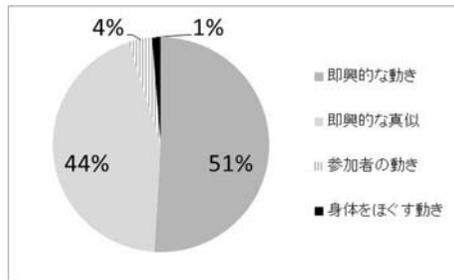


図2 提示された動き別実施時間 (%)

図2を見ると、「即興的な動き」が51%と最も高い数値を示した。次いで「即興的な真似(44%)」「参加者の動き(4%)」「身体をほぐす動き(1%)」であった。「即興的な動き」とは、即座に動く型のない自由な動きである。「即興的な真似」とは、即興的な動きの中でも、参加者が進行者の真似をして動いている際の動きを取り上げた。「参加者の動き」とは、参加者の動きを全員で真似する、進行者が参加者の動きを取り上げるなど、参加者の動きを内容として取り上げた際に分類した。本事例における「参加者の動き」は、全て型のない即興的な動きであった。つまり本事例は、99%が型のない即興的な動きであり、DWS中多くの場面で、参加者が即興的に動いているという特徴が認められた。また「参加者の動き(4%)」は、参加者が何気なく行った動きが取り上げられてダンスの動きとされていたことから、「何気ない動作や日常の動きがダンスになる」という気づきが期待された。

次に、本事例において挙げられた、動き以外の提示方法について述べる。

表2は、2回のワークショップで共通して見られた提示方法である。ここでは、本事例において特に顕著にみられた4つの提示について説明する。

表2 「動き」以外の提示方法

動き以外の提示方法	説明
他者と関わって踊る	2人組・グループ等他者と関わる活動形態
身体感覚	身体感覚を意識する言葉かけ
イメージ	イメージをてがかりに動く
音楽	音楽に反応して動く・音楽と身体の理解を深める

まず「他者と関わって踊る」は、2人組や4人組など活動形態として他者と関わり踊る提示方法が見られた場合に抽出した。本事例では、活動のほとんどの場面で他者と関わって踊る提示が見られ、活動形態として積極的に他者との関わりを促していることが推察された。これについて進行者は「日本人って人と組むことが少ない(A)」と他者との関わりの希薄さを述べており、そのうえで「もっとダンスの中で、手をつないだり・・・そこで自分以外の身体の実在を通して自分が見えてくるみたいな。そういう体験が・・・発見できるので、人と踊ると(A)」と述べている。このことから、他者との関わりを提示する背景の一つには、他者の存在を通して自分を振り返るといった進行者の考えがあるとうかがえる。その他にも、参加者同士の関係性の重視や「繋がるだけならみんなが動ける(A)」という取り組みやすさへの工夫が背景にあることが考えられた。次に「身体感覚」では『声質をかえて、動きに強弱をつける』内容に見られるように、言葉かけによって質感の変化を促す提示が見られた。またこの提示において進行者は、説明的に身体感覚を意識させるのではなく、擬音語を多く用いて動きを通して提示するという特徴が見られた。例えば「手を握ります、次に手を開きます」といった、動きを解説する示し方ではなく「ぐっ、ぱっ、ぐう～ばああ!!! (B)」というように、感覚的な言葉と実際の動きを通して提示を行っている。つまり、頭で理解し動くのではなく、参加者の感覚に直接届く提示を行っていることが考えられた。3つ目に「イメージ」では、『空気を触る』や暑さ・寒さをイメージして動くといった、参加者の想像性に問いかけるような言葉かけや提示が見られた。イメージを提示することで、参加者それぞれが、自分自身の身体感覚について様々に想像することができると考えられる。つまり一つのイメージから多様な解釈が生まれ、多様な動きが生まれていると考えられる。最後に「音楽」では、進行者がリズムに合わせて動きを提示している、参加者がリズムにのって自由に律動する、歌の質感や歌詞を捉えて動くなど、音楽を手掛かりに参加者が動く様子が見られた場合に抽出した。本事例では、音楽を提示することで、「律動」によって多様に動く活動と「質感やイメージ」を捉えて動く活動が見られた。進行者はワークショップの中で「体の中にあるリズム(B)」と「外からのリズム(B)」が共振し、それによって踊ることで「盛り上がり(B)」を生むこと、そして「やればやるほど元気になって、疲れるんだけど汗もかくんだけど元気になる(B)」と述べている。選曲についてもインタビューより「事前に様々なパターンを用意する(A)」こと、そして参加者の反応を見ながら用意したパターンの中から臨機応変に音楽を流していることが認められた。その際「必ずみんなが、あ！知ってる～っていうような曲を使うというのは特徴かもね(A)」「子どもも知ってて大人も知ってる曲を選ぶ(A)」「ある意味で和やかな曲を選んで。大勢でシェアできる曲(A)」という回答に見られるように、そこに参加する参加者たち幅広く共有できる選曲を行っていることが認められた。

2) 言葉がけの特徴

言葉がけの特徴として、各プログラム内容において活動中の指示や言葉がけが少ないことが挙げられた。これはインタビューにおける進行者自身の発言からも確認されている。進行者は言葉がけについて「いくらでも理屈で説明することはできるけど、例えばこのクランベリージュースがおいしいって説明するのに、ちゃんとみんなが分かるように説明するよりも、本当においしいと思って笑った方が伝わる(A)」と述べ、言語的な説明よりも、身体を介しての伝達が伝わりやすいと考えていることがうかがえた。加えて、本事例の進行者は擬音語を多く用いるという特徴も挙げられている。ここから進行者は、言語的に説明し頭で理解させて動くのではなく、身振りや動き・擬音語を通して感覚に直接訴えかけることで、参加者への伝達を工夫していることが考えられた。その他の言葉がけの特徴では、「適当感」という要素が挙げられた。進行者はワークショップにおいて、「適当に(B)」「なんとなく動く(B)」「なんかよくわからないけどなんとなく(B)」といった「適当感」を表す言葉を多用している。特に、参加者が自由に動きを生み出す場面において多用するという特徴が見られた。そして反対に、指示的な言葉がけがないことも特徴として挙げられた。これについて進行者は「それぞれが無理しないところで参加できる位置を調整するには、適当感という要素が必要で、その適当っていうところで頑張る人もいれば、適当っていうことですごくだらだらする人もいれば、そこでこう、なんか、なんでしょね、いい感じで調整できるんですね。体と気持ちを(A)」「とにかく気軽にいてほしい(A)」と述べている。つまり、「適当感」は選択の幅と気持ちの落ち着きを生み、様々な参加者の動き出しを容易にすることが考えられた。また進行者が「適当感」を意図する背景には「受け身で参加するって誰もにとってつまらないことなので、みんなが自ら参加するっていう状態になることが楽しいじゃないですか(A)」「正解がない中で自由に楽しんでほしい(A)」という考えもある。ここから指示的な言葉をなくし、適度な緩やかさ・適さをもたせることで、自ら主体的に参加し、個々が自由に楽しむことができるような工夫を行っていることが考えられた。

3) 関わり方

次に、プログラム展開における進行者の関わり方について考察する。

本事例に特にみられた特徴として、進行者は参加者と一緒に動きながらリードをするという特徴があり、自身も積極的に活動に入り、参加者と一緒になって動くという関わり方が見られた。また同じリードでも、参加者が進行者の真似をしている状態でリードする関わり方と、参加者が自由に動いている状態できっかけ役としてリードする関わり方を分けた結果、本事例ではリードの中でも、経過と共に関わり方の変化が見られた。特にワークショップにおけるはじめの段階では進行者の真似をさせるというスタイルが見られ、参加者は次々と繰り返される進行者の動きを即座に捉えて動くという場面が見られた。そこから徐々に、きっかけ出しのみに移行し、また、全体を観察しながら必要に応じ言葉や動きによってリードするという関わりをしていることが分かった。つまり、進行者がきっかけ役や観察側になり、その間参加者自身が主体的に動く場面があることが分かる。またこの関わり方の変化は、大きく2つのパターンがみられた。1つ目は、プログラム内容ごとに、「リード(真似)」から「リード(きっかけ)」へ変化しそれが繰り返されるパターン。2

つ目は、ワークショップを通して徐々に変化していくパターンである。この2つの関わり方の変化から、ワークショップの構成においても2つのパターンが考えられた。1つ目は、進行者が主体となる場面と参加者が主体的となる場面が活動ごとに繰り返されて内容が発展的になっている構成。2つ目は、進行者が主体となる場面と参加者が主体的となる場面がワークショップ全体を通して徐々に移り変わっていく段階的な構成である。その他の特徴では、活動の前後に「説明」「助言」が見られたことも挙げられる。進行者は活動中に言葉かけが少ないことが分かっており、その分、活動の前後でしっかりと説明や振り返りを行うことが推察された。

まとめ

プログラム内容では、進行者のリードで多様な動きを体験し動きや感覚を意識する内容、他者や音楽を手掛かりに自由に動きを生み出す内容が特徴としてあげられた。また提示された動きは99%が型のない即興的な動きであり、形やステップの習得ではなく、即座に反応して動くという特徴が認められた。言葉かけでは、限定的な指示が見られなかった。進行者の関わり方では、進行者が積極的に参加者と共に動き、即興的な動きでリードした後、参加者個々の動きに移し、きっかけをつくるようにリードするという特徴があげられた。これらのことから本事例は、自由度が高く、参加者が動きのレベルと範囲を選択して行うことができると考えられる。また自身の動きや感覚を意識する体験の後、他者や音楽を手掛かりとして自ら動きを生み出す体験があり、それが繰り返し発展的に行われることで、参加者はより自由に、主体的に活動していることが考えられた。これらの背景には、進行者と参加者といった立場を分けた指導を指摘し、参加者同士の関係性を重視して、自身も同じ立場で参加者に関わるという、双方向の学びに対する進行者の考えがあることが分かった。特に本事例の進行者は、自身のワークショップを「空気感染システム(A)」と呼び、動き・音楽・場の空気など様々なものを参加者同士で共有することで、それぞれの関係性が次の関係性や展開を生む、と考えている。

以上のことから本事例は、参加者同士、参加者と進行者といった様々な「関係性」を重視され、そこから生み出される展開を通して、参加者それぞれがより主体的に、自由に動きを生み出す体験が創り出されていることが考えられた。このようなDWSの特徴は、学習者の主体的な動きを引き出すダンス授業や、学習者と指導者の双方向に学びのあるダンス授業として、学校教育において示唆に富むものであると考える。

注

注1. 「NPO 法人芸術家と子どもたち」は2000年より、アーティストが小学校・中学校・保育園・幼稚園・児童養護施設などに出かけて教員と協力しながらワークショップ型の授業を展開する「ASIAS」と呼ばれる取り組みを開始。初年度7校からスタートし、昨年度は年間78校が参加するまでになっている。

注2. 「学校の先生のための舞踊教育 WEB 動画/教材 DanceLeaf」平成25年度・26年度文部科学省「児童生徒の人間関係形成能力やコミュニケーション能力等の育成に関する研修等の調査研究」採択事業として NPO 法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク, DANCE AND MEDIA JAPAN, セレノグラフィカ, NPO 法人子どもとアーティストの出会いが共同開発したダンス教材。

<http://www.jcdn.org/danceleaf/>

引用・参考文献

- 1) 原田純子 (2012) ダンス・ワークショップにおける学びについての一考察 - 創造体験とグループ活動の意味 - . 女子体育学術研究, 28 : 17-29 .
- 2) 伊藤美智子・岡沢祥訓・林信恵・北島順子 (2000) ダンス授業における教師行動に関する研究：ダンス授業と他の授業との比較 . 大阪体育大学紀要第31巻 : 9-17 .
- 3) 増山尚美 (2003) コミュニティ・DWS にみる生涯学習社会における学習形態について . 北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要「生涯学習研究と実践」第4号 : 123-133, 北海道 .
- 4) 文部科学省 (2013) 学校体育実技指導資料第9集表現運動系及びダンス指導の手引 . 東洋館, 東京 .
- 5) 村田芳子 (2005) ダンス授業はここが楽しい . 体育科教育, 53 : 14-17 .
- 6) 中村恭子 (2012) ダンス教育の展望と課題 . 体育科教育 : 60(2) : 18-21 .
- 7) 中野民夫 (2001) ワークショップ . 岩波書店, 東京 .
- 8) 中野民夫 (2003) ファシリテーション革命 参加型の場づくりの技法 . 岩波書店 : 東京 .
- 9) 白井麻子 (2012) コミュニティ DWS の参加体験とイメージに関する研究 - 大学生を対象として - . 大阪体育大学紀要, 43 : 53-65 .
- 10) 高橋るみ子 (2012) 芸術家と協同で創る表現運動の授業 . 体育科教育 : 60(2) : 24-27 .
- 11) 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司・芳本真 (1991) 体育授業における教師行動に関する研究 - 教師行動の構造と児童の授業評価との関係 - . 体育学研究36 : 193-208 .
- 12) 山内祐平・森玲奈・斎藤勇樹 (2013) ワークショップデザイン論 - 創ることで学ぶ - . 慶應義塾大学出版会 : 東京 .

表3 6月6日午前プログラム展開

2013年6月6日 対象：小学3・4年生	プログラム内容	活動形態	進行者の行動	言葉かけ
0:03:00	体で挨拶 自己紹介 準備	整列	挨拶	こんにちは～！こんにちは！！ 去年は私、山田うんと、ロン君と来ましたが、今年は、じゃじゃーん！ まず、帽子と！くつ！靴も、靴下も！脱いでおいてきてくださ～い！ 最初、準備体操からいきまーず～ぐ～っのびて～！はいじゃあ縮みまーず。
0:07:00	準備運動			
0:07:40	体でバーグーチョコキの形をつくる ①FTのリードで体を開く・縮める・終める ②色々な形のバーグーチョコキをつくる ③声質をかえて、動きに強弱をつける	一斉	リード(真似)	はいばー！！はいぐー！！ばー！ぐー！ばー！ぐー！ ちよき！(5回)ばー！(4回) ぐるぐるばー！(2回)ぐっ！ばっ！ぐっ！ばっ(小さく)ぐっ！ぐう！ じゃあ今からじゃんけん大会をしますよ？
0:08:24			説明	
0:08:45	④体でじゃんけん大会		リード(きっかけ)	最初はぐー！じゃんけんばい！勝った？お！お！ ではなるべく、足も手も使ってじゃんけんします！ はいーいバーで伸びてストレッチー！
	⑤伸びる・縮む・伸びる		説明	
0:11:27	⑥体でバーのまま、いろいろな人とハイタッチ		リード(真似)	はいそのまま背伸びしたら、はい誰かと、誰かとタッチー
0:12:50	トンネルで遊ぼう ①最後の人と2人組をつくり、トンネルをくぐったりまたいだりする	2人組	リード(真似)	とんねる作ろうかな はいーいでは～(くぐりだす)色んなことをしてくださいーい
0:15:41				
0:23:18	誰かと関わって色々な動きをする ①2人組で手を繋ぎ色々な動き	一斉	リード(真似)	
0:24:32	②1人で色々な動き	2人組		
0:25:15	③2人組で手を繋ぎ色々な動き	4人組	リード(真似)	
0:28:14	④4人組で色々な動き ⑤8人組で色々な動き ⑥16人組で色々な動き の全員で色々な動き	8人組 16人組	リード(きっかけ)	
0:34:21	だるまさんが転んだ		リード(真似)	
0:34:35	①だるまさんが真ん中による		リード(真似)	し～！ だるまさんが転んだ！！だるまさんが倒れた！だるまさんが暑い！！
0:36:04	②だるまさんがシリーズで多様な動き 多様なイメージで動く ①参加者やFTが発した言葉を取り上げて動く	一斉	リード(真似)	あ～ちいっつ。あ～ちいっつ。 さむっ。さむっ。
0:37:23	はじめの一歩 ①はじめの〇〇で多様な動き		リード(真似)	はじめのいっつぽ！はじめの～片足！はじめの～けんっつ！ はじめのいえいっ！はじめの指！はじめのいえいっ！はじめの指！
0:39:00	打楽器の音楽に合わせて弾む ①その場の動きから、空間を移動へ変化			しゅっ！しゅっ！ あっち！ のど乾いた人～？？
0:45:07	休憩が必要か尋ねる 7分7秒		発問	
0:52:04	楽器を使って遊ぶ ①集合説明、	一斉	指示	はい、今、なんとなくみんなで、友達や、今日初めて会ったダンサーたちや、 音楽に合わせて
0:54:16	チーム分け ②音楽家のリードで、楽器を鳴らす・歌詞を考える		説明 指示 観察 指示 観察	なんとなく一緒にリズムにのったり、のりをつったり、全身でやったりしたね 全身が眼みたいにいろいろなことをみているので、みんなきちんとキャッチできて ました。今もキャッチできてました じゃあこれからですね、ちよっとみんなで、ダンスするんだけど、ダンスの前 に、動きでやったりリズムみたいなのを、音でやってみたいと思います。 じゃあ交代してみようか！
1:05:02	音楽にのって踊る①		指示	楽器を持っている人は、つばめくんのところに行ってくださいね。楽器を持って いない人は、私のところに来てください。まず、じゃあ輪になろうか！
1:05:29	①FTの真似をしながら、音の強弱・テンポに 反応して、円形で動く		リード(真似) 助言 指示	
	チームを交代する FTの真似をしながら、音の強弱・テンポに反 応して、円形で動く		リード(真似)	チェンジ！
1:17:26			助言 指示	
1:17:44	音楽にのって踊る②(自由に) ①説明 ②音楽隊とダンス隊に分かれて演奏・踊る	グループ (全体を2 つに分け る)	説明 示範 指示	ダンスの輪(円形)の中は、色んな自由に動きをつくってみます。マネっこじゃ なくて、誰かと一緒に踊ってみてもいいので。 じゃあこの輪の中でみんなは、こうなんとなくね、誰かがいて、自由に、動い たりね
1:20:02				
1:20:34	円形の中心に出て自由に踊る 段々と円が崩れ、それぞれが自由に動く		リード(きっかけ) 観察 助言	
1:26:35	音楽にのって踊る③(自由に) ①説明		示範 指示	OK！そう！今みたいな感じ！ いろんな動きをみんなできつたり、または、消したり。OK？誰かの動きをみ ていたり応援したりします はい！では、一緒にやってみてください！立ちまーず！！
1:26:59	②音に反応して自由に踊る		リード(真似) リード(きっかけ) リード(真似) 助言	
1:33:04	交代 説明		指示 説明	交代～！ お友達とやったり、一人でやったり、いろいろです
1:35:04	音に反応して自由に踊る		リード(真似) リード(きっかけ) リード(真似) 助言	
1:39:17	楽器の片づけ		説明	じゃあ楽器を箱に戻しまーず！！
1:39:59	感謝をこめてたたく ①一緒に踊った色々な場所をたたく (体育館・お友達・自分の身体・空気)	一斉	説明 リード(真似)	一緒に、まず、踊ってくれたみんなにありがとうございましたと言いたいと思 います ではまず、頑張ってくれた体育館に、ありがとうございました！ 一緒に踊ってくれたお友達に、ありがとうございました！！
1:41:09	まとめ		発問	はい、それではおしまいです！どうする？
1:41:49	参加者の提案した動きで終わる		リード(きっかけ)	はい、それでは体をいっぱい使ったので、全身でばいばいをしたいと思 います。

表4 6月6日午後プログラム展開

時間	対象:小学5・6年生 プログラム内容	活動形態	進行者の行動	言葉かけ
0:00-04	挨拶・説明		挨拶	はい！こんにちは～
	準備		指示	靴下と上履きを脱いだら～脱いだら～ここへ戻ってきませう
0:01-45	準備運動			準備体操からしたいと思います
0:02-35	①色々な人とハイタッチ	一斉	リード(真似)	できるだけ高いところでね、できるだけ多くの人と、よろしく願いますのタッチをします
	輪をつつて真ん中による		指示	はいいじやあそこで～ 大きな輪をつくりませう。
0:04-04	目を閉じて2人組をつくる		リード(真似)	目をつむつたままばんざーい！そのままをつむつたまま高いところで誰かと手を繋いで2人組をつくらせよ
0:05-20	誰かと関わって色々な動きをする			はいいじやあしあーい。ぎゅ～！！
0:12-30	鏡の動き	2人組	リード(真似)	鏡のように。ランダムに～。どっちが動いてもいいよ～どっちがリーダーでもいいよ～
	①2人組で鏡の動き	4人組	リード(きっかけ)	ゆつり近くの2人組と合体。4人組になります
	②4人組で鏡の動き			更に合体。8人ずつになります8人鏡！どん！
	③8人組で鏡の動き			真ん中に少しずつ、何か、不思議な形をしてみます。みんなてつながってみよう
0:20-26	自由につながったポーズを作る	8人組		どこか違うところにつながる
0:25-08	①誰かと繋がったポーズをつくる ②半数で繋がったポーズをつくる ③全員で繋がったポーズをつくる	半数	リード(きっかけ)	解散～ 今とおんなじポーズをつくる 半分！今までくつしたことがない人と、くつしたポーズ！てっかいぼーず！！！！ ストップ！！合体したまま目をつむつて別のところ合体！違う誰かのところと合体
0:29-00	④目を閉じて違うポーズ			目を閉じたまま、足踏みをします。どん、どんどん。
0:29-34	リズムにのって自由に弾む		リード(真似)	目を閉じませう。ステップをそのまま繰り返して！手はばんざーい
0:29-53	①足踏みをする			今度は音楽と繋がるように。音楽を聴きます
0:29-53	②リズムに合わせて自由に踊る		リード(きっかけ)	
0:34-37	段々とリズムに合わせて動きが激しくなる		指示	OK！座っていいですよ～
0:34-53	太鼓に合わせて即興的に踊る		説明	さすが去年一緒に踊ったりしたし、すぐみんなの中にはなにかこう、なんでしようね。言葉をしゃべって歌ったりするみたいに踊りて、なにか体の新しい言葉があるみたい
0:37-00	①感想・説明 ②ファンリテーターが太鼓に合わせて踊る		発問	あの黒いやつ何かわかる
			示範	こうやって太鼓が鳴ると踊りだしたくなります
			説明	じゃあねちよこの太鼓で踊ってみたいと思います
0:37-53	③サポートメンバーが前にでていき太鼓で即興的な動きを見せる		観察	
0:42-05	④生徒を巻き込み、全員で自由に踊る		リード(真似)	
0:44-35	音に合わせてポーズでおわり休憩	一斉	リード(きっかけ)	ブラボー素晴らしい！素晴らしいよみんな！お水飲んで来よう！
0:50-44	音楽と身体の関係について ①感想をきく		指示	では集合！すわりませう
			発問	今じやんべのリズムで踊ったらどんな感じだった？
	②説明		説明	いつも自分の中にある心臓は全身をタッチしてくれるけど、音楽は外からただただタッチしてくれて、自分の身体を通してダンスするとそれがみている人や遠くの人にも伝わって、もっただだだ～が振動で伝わってそしてきき取ってくれたみたいにとどんと盛り上がるの。
				じゃあ今度は違う音楽を聴いてみたいと思います。色々な音楽と色々なダンスの組み合わせがあるので。
				じゃあ今度は違う音楽を聴いてみたいと思います。色々な音楽と色々なダンスの組み合わせがあるので。
0:53-22	「花」という曲で自由に踊る		説明	
0:55-56	①「花」を聴く		観察	
	②FTが「花」に合わせて自由に踊る		示範	
	③歌の説明		説明	花っていう歌なんです。沖縄の。沖縄ってわかる？？日本列島のびよってでてるよ。
	④音楽家に合わせて1フレーズを覚える		指示	じゃあみんな立ってみよう
	⑤歌の感想をきく		説明	この歌の持っている雰囲気と踊りを合わせてみたいと思います
			発問	
			助言	優しくて柔らかいけど、悲しくて切ない感じ。なんかみんな心や体の中に持っていて、普段心臓の音を1・2・・・きいてるわけじゃないけど、知ってることのように、全員知ってると思います。だからなんかその不思議な感じっていうのを動きでつくってみたいと思います
1:04-27	円に広がってからグループをつくる ⑥説明 の「花」に合わせて自由に動く	グループ(2～3人)	指示	まずは！立ってさっきのように輪になって
			説明	まずはそのグループで動いてみます。優しくて柔らかいソフトな感じで。
1:12-22	⑧感想	一斉	助言	踊りって何かこんな感じにしようって相談しなくてもできちゃう。なんか隣の人が次こんなことしようっていうのわかる
			発問	歌と音楽とみんなできりながらもうちょっとやってみたいと思うんだけどこんなやってみたいかある？
			指示	じゃあちよと座ってください
	楽器に合わせて自由に弾んで踊る		説明	今度は、激しく盛り上げていく太鼓班と、太鼓に負けないうらいたんダンスするダンス班に分かれて、チャレンジしてやる。どーですか？
	グループ分け		指示	じゃあ5年生と6年生の4班と3班の人！
	①音楽家のリズムに合わせて楽器を練習		観察	じゃあつばめくんから。楽器をもらってください
			指示	たって～
1:19-53	②リズムに合わせて自由に弾む	半数	リード(真似)	
			リード(きっかけ)	
			指示	いえーい！ちえんじ！！
	チームを交代する		指示	
	③音楽家のリズムに合わせて楽器を練習		観察	
1:23-48	④リズムに合わせて自由に弾む		リード(真似)	
	楽器隊が楽器をもって踊るほうへ移動する		リード(きっかけ)	
1:26-48	音の終わりでポーズをとまる			
1:27-13	空気を触る		リード(真似)	最後にみんなで輪になります。素晴らしいです。さすが5・6年生
	①色々な場所を空気を触る			空気を触るように撫でながら触ります
	感謝をこめてたたく		説明	さすが5・6年生のダンスも素晴らしいからかと思っておりますので、今日の私たちを支えてくれた体育館の床に思いっきりみなで挨拶をしたいと思います。ありがとうございます
	①説明	一斉	リード(真似)	たくさん一緒に動いてくれたエネルギーのお友達にありがとうございます
1:30-30	②一緒に踊った色々な場所をたたく			今日たくさんエネルギーをおなか一杯吸い込んで、はいて、みんなに分けた、偉い体にありがとうございます
1:32-03	まとめ		説明	本当に素晴らしい自由さと、集中力と、面白さと、まじめさと、本当にみんなとてもたくましいなと思いました
	①感想			終わりに何を？
	②終わりの方法を参加者にきく		発問	ふーんよん！！
1:33-08	③参加者の提案したポーズで終わる		リード(きっかけ)	はいー！じゃあさようなら～